

私たちは北大に働き、研究し、学んでいますが、知らないことがたくさんあります。その一つが、北海道の先住民族であるアイヌの人々の遺骨問題です。北大はいまこの問題で裁判に訴えられています。なぜ訴えられているのでしょうか。

そこで、北大が訴えられている問題—アイヌの人々の遺骨問題—を知るために、北大教職員組合として学習会を開くことにしました。多くの皆さんの参加を期待します。

アイヌ遺骨問題に関する学習会

「アイヌの遺骨はアイヌへ！！」

講師:市川 守弘 氏

(弁護士、アイヌ遺骨訴訟の原告代理人)

日時:2013年6月14日(金)

18:00~20:00

場所:文系総合教育研究棟W410



北海道新聞は4月30日付け社説(裏面)で北大を厳しく批判しています。学習会では、北大アイヌ遺骨訴訟の原告代理人・市川弁護士に真実を語っていただきます。

北大開示文書研究会ホームページより <http://hmjk.world.coocan.jp/introduction.html>

北海道大学医学部の駐車場の一角に、「アイヌ納骨堂」という小さな建物があります。

ふだんはシャッターが下りて、入れません。じつには中には、約1000人分もの遺骨が、それぞれ小さな箱に収められて、スチールの棚にずらっと並んでいます。すべてアイヌ民族の古いお骨です。アイヌは北海道の先住民族です。なぜ、先住民族のお骨がこんなにもたくさん、大学の構内なんかに集められているのでしょうか？



2010年8月撮影。

北海道大学教職員組合

札幌市北区北11条西5丁目北大構内
E-mail: kumiai@ma4.seikyuu.ne.jp

電話 011-746-0967 北大内線 3994
<http://ha4.seikyuu.ne.jp/home/kumiai>

アイヌ遺骨 親族への返還最優先に

研究目的で道内外の墓地から集められたアイヌ民族の遺骨が、北大など全国11大学に合わせて1633体保管されていることが政府の調査で判明した。

骨の比較研究はかつて、諸民族の系統を割り出すため、日本や欧米で盛んに行われた。

しかし、国内では保管実態も分からぬまま、数十年間も放置されてきた。あまりのずさんな管理に驚く。到底許されることではない。

この実態は、文部科学省が全国の大学に報告を求めて初めて明らかになった。北大が1027体と突出して多く、札医大249体、東大198体、京大94体、大阪大39体、東北大20体などとなっている。

保管状況から個人が特定できるのはわずか23体だった。これは全体の1%強にすぎない。研究後は遺族に速やかに返還するのが当然だ。

「誰の遺骨か不明」で済む問題ではない。政府の助成を受け、国立大学を中心に研究が行われた以上、遺族や親族への返還義務を負うのは、なおさらである。

各大学はすべての特定を目指して鑑定に全力を挙げ、一刻も早く親族の元に返さねばならない。今回の調査はその一歩ととらえるべきだ。

とりわけ北大では、全身の骨がそろっているのは一部で、分類しきれない四肢骨などが多数あるという。

骨は言うまでもなく人体の一部である。こうした扱い方には、人間の尊厳を尊重する姿勢も、民族に対する敬意も全く感じられない。

祖先の遺骨を持ち去られ、粗末に扱われてきたアイヌ民族の憤り、苦しみは想像するに余りある。北大を相手取って返還訴訟を起こしたのも当然の権利行使と言える。

国は返還を進める方針だ。そのためのガイドラインを早急に作る必要がある。もちろんアイヌ民族の意向を反映する仕組みが不可欠だ。

北大を含む各大学の研究者が、遺族の承諾を得たうえで適切に調査を行ったのか。その詳細な実態解明も強く求めたい。

欧米では、過去の研究への反省とともに、先住民族の権利保障の観点から、大学や博物館が主体となって返還作業を進めている。

2007年には国連の先住民族の権利宣言に、遺骨の返還を求める権利が明記された。国会が、アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議をしたのはその翌年だ。取り組みがあまりに遅すぎる。

返還できなかった遺骨については、政府が胆振管内白老町に慰霊施設を建設し、安置する計画がある。

それは手を尽くしたうえでの最後の選択であることを、関係者は認識しなければならない。